

声の日本語、文字の日本語 — 神々は歌ふ —  
(雑誌『大航海』46号新書館 2003年3月原稿)

日本語に固有の遺伝子があるはずはない。しかしヒトには言語能力がある、という意味では人間には言語遺伝子がある。古い言語学は印欧語族という概念を定着させたが、ヒトの系統についての遺伝子学の知見は、印欧語基準による言語分類を見直すきっかけを作った。最近の遺伝子研究は、現代のヒトを今から十五万年以上前のアフリカ中北部にさかのぼらせる。スタンフォード大学のカヴァリ・スフォルツァ教授の率いる遺伝子研究チームによれば、ヒトの集団がアフリカの中で東西に分裂したのが十万年ほど前。西行した集団はアフリカ南部で行き止まるが、東に動いた集団はスエズ地峡を通り、カスピ海南部に至って五万年ほど前に南北に分かれる。南に下った集団はインドからインドネシアをへて中国南部とオーストラリアに行き着き、北上した集団はカスピ海の北で三万五千年から四万年程前、コーカサスの北を通り西のヨーロッパ方面に行く群と東の中央アジア方面に向かう群とに分かれる。この東に向かった集団は今から三万年から一万五千年前、ベーリング海峡を通過してアメリカ大陸に入る者と、満州、モンゴル、チベット、朝鮮半島、日本列島といった極東地域に展開する者とに分かれた。この現代人の俯瞰図は、アイヌを含め原日本人の起源を北東アジアに求めた分子人類学者尾本恵市博士の説に重なる。

遺伝子研究チームの言語部門担当ともいえるメリット・ルーレンは、日本、朝鮮、アイヌ語など極東言語が印欧語と同じ起源をもつばかりでなく、世界の言語が一つの祖語に収斂するという説(1994)を立てた。民族と言語が一致するわけではないが、印欧語文法の頃と違い、原日本語と北アジア印欧祖語(ユーラシア語)を関係させてもおかしくはない時代になった。比較には語彙の音声上の類似だけでなく、価値構造の類似を見い出す必要もある。現代人アフリカ起源説からみれば、タミル語(ドラヴィダ語)とヤマト語との関係はあって不思議ではない。しかしインド大陸の南端からのヤマトへのヒトの直接移動は私には想像の外である。原日本語と印欧語以前の言語とされるドラヴィダ語との深層の共通点を探るためには、まず原日本語の構造を、接触していたことが判明している近隣言語との関わりから推定してみる必要があるだろう。本稿では縄文時代の価値観と、それが支えた原日本語とはどのようなものであったかを、アイヌ語および印欧祖語との関連から探ってみたいと思うのである。

青森市南西郊外の三内丸山遺跡から、新しく発掘された縄文の集落遺跡は驚くべきものである。この縄文人の住居跡は青森県との県境にある私の田舎(秋田県鹿角郡小坂町)から遠くない。明治以来鉾山だった私の町は、以前は山にはアカシアぐらいしかなかったが、赤茶けた地肌の所々に縄目の土器のかけらが露出していることがあり、古くからヒトが住んでいたことは知られていた。環状列石で有名な隣の大湯町には、縄文人の住んだ痕跡はさらに色濃く残る。二つの町の北方十数キロにある十和田湖(昔は活火山)の北には、青森市の方に裾野が伸びている八甲田山があり、三内丸山はこの山の北麓の海辺にあった。

三内丸山遺跡は、今から五千五百年前から約千五百年続いた集落(というより都市)の跡である。公共施設と思われる大建築物跡(祭祀場、あるいは共同作業場)が真中にあり、近くに郷倉、台地の突堤と思えるところには、巨大な構造物を支えたに違いない、直径一メートルほどの六本の栗の木の柱が、等間隔に埋め込まれていた。土器のかけらが層をなした堆積地、大人用、子供用の墓地などの整然とした配置から、この空間を統御する明確な意志が存在していたことがわかる。魚骨から推定される漁業と漁法。小動物の骨が示す山の幸。つたを編んだポシエット、朱塗りのくし、腕輪、大小さまざまな土偶、火炎紋様の土器。ここからは生活の豊さ、すぐれた芸術感覚さえ伝わってくる。岩手、秋田付近だけでなく、北陸や北海道の遠隔地から運ばれた琥珀、アスファルト、ヒスイ、黒曜石。三内丸山は単なる自給自足の集落ではなく、四方に開かれた富の一大集積流通センターであった。

ヒエヤひょうたん、エゴマ、ゴボウあるいは栗、漆の木なども管理栽培されていた。「彼ら」は狩猟、採集に追われていたのではなかった。こうした大集落がほとんど間断なく同じ場所に千五百年も続いたことは、現代の私たちにとって驚嘆すべきことである。この都市を継続させた堅固で安定した社会の価値観とはいったいどのようなものだったのだろうか。

三内丸山出土の土器には多彩な紋様が施されているが、文字記号のたぐいが刻まれたものはない。今後も文字が出土することはないだろう。しかし整った集落の中に公共の建物をつくり、支え、維持していくのには、思考の集団的一貫性、あるいは合理性は絶対に必要である。言葉というものがこの活動の根源にあったと言い切ることはできないが、この社会の価値観と、言語という、表現、伝達方法との間に緊密な関係があることは確かだ。言葉は単なる情報伝達の手段ではない。言語はそれぞれ一つの世界観であり価値の体系である。言葉が違えば世界が異なる。

いまから五千年前といえば、ユーラシア大陸のあちこちで言葉や数の概念を文字記

号であらわそうという試みはすでに始まっている。イランやエジプト、そしておそらく中国でも、原始的表意記号が伝達の役割を担いはじめていた。しかし日本は固有の文字を生み出すことはなかった。列島の縄文人は文字のない言語、声による言語でものを考え、表現し、声の直接的価値の下で生きていた。彼らは記憶し、歌うことはあっても書くことはなかった。

### 声、文字、法

西洋のもっとも古く、もっとも完成された文学発現といわれるホメーロスの二作品は三千年以上前のギリシャ社会を歌ったが、その周りで文字の生成が一つのやまを迎えていた時期にもかかわらず、二万八千行近い作品のなかに「文字」gramma という文句は一度も用いられない。文字らしいものの表現は唯一「イーリアス」第六巻(168 行目)にでてくる semata (sema の複数) lugra (不吉なしるし) という語である。しかしこの箇所の意味は文脈からいって正真正銘の文字であるのか、紋様であるのかははっきりしない。これを注釈したある学者はアキレウスの時代はまだ文字がなかったと主張し、またある注釈者はここに用いられたセーマという語をもって文字が当時存在したと解釈した。要するにホメーロス時代以前はギリシャでは長く文字不使用の時代が続き、文字が使われはじめても、すぐさま幅広いはたらきをしたのではなく、細々とした備忘録的機能を果たしていたにすぎない。

「イーリアス」後の世界を描いている「オデュッセイア」でも、セーマは用いられるが文字(グランマ)はない。セーマの意味も、なにか具体的な「しるし」、あるいは「墓(のしるし)」といったものだ。ホメーロスの時代は確実に文字が存在し、ある機能をはたしていた時代なのに、作品の中では確認されない。声を言語表現の第一の方法としていたこの詩人たちの、勃興してきた文字に対する無関心は、時代遅れぶりや傲慢さを示すものでは決してなく、間接性(文字)を排して直接的手段(声)に向かう真剣な姿勢の表われとみるべきだ。

当時の詩人にとって言葉とは肉声で表明すべきものであり、文字ごとき不浄な記号で表わすものではなかった。言葉は肉声で伝えなければならない、という思想は聖典ヴェーダの口頭による正確な伝承を重んじるインド文化に顕著だが、これはホメーロス以前の世界であったミュケーナイ時代の書記法の線文字 B にも認められる。音節を単位とする仮名に似た文字が刻された粘土板は、外交や戦い、あるいは集団的記憶にふさわしい共同体成立の記録ではなく(それらはおそらく口頭で伝えられた)、徴税や各地の各種生産品の記録、またその流通といった経済活動に関係していた。驚くべきこ

とに粘土板は一年ごとに破毀されている。ミケーナイ文明では文字は必要だったが、それを刻したり、あるいは運用する技術が格別重要とは考えられていなかったようで、書記をあらわす語さえ存在しない。経済事務に密着した線文字 B はミケーナイ世界が滅びると同時に忘れ去られ、三千年以上たった二十世紀になるまで解読されなかった。文字に対するこうした蔑視は、ギリシャ語、ラテン語、またその精神を引き継ぐ中世フランス語の演述においても見られる。雄弁術の影響を受ける文章構成より、弁説そのものの方がはるかにすぐれた言葉の技であった。キリスト教は「聖書」という文字宗教と思われがちだが、文字を知りながら書くことはなかったイエスも古代の常識を守ったのである。

文字に対する扱いが、この傾向の対極にあるのがファラオ時代のエジプトである。線文字 B では誰が刻したかはもちろん、「書記」という職種も見当たらず、どんな職業の人が関係したかも知られていないのに対し、今から四千五百年前のエジプトは、文字を刻す書記の美しく彩色した像を残した。エジプトでは文字の始源は神聖なもの（「聖刻文字」）であり、文字化した言葉の威信は絶大なものであったと想像される。だが、文字の国と思われるファラオ時代のエジプトでも、日本の無文字時代の価値観と同じものが認められるのである。

今から三千六百年から三千百年前、古代エジプトでもっとも栄えた第十八から二十王朝にかけてのファラオ時代は日本では縄文後期にあたる。フランスのエジプト学者クリスチャン・ジャックは、古代エジプト社会を小説の形で表わしているが、その中にラムセス二世時代の法官を主人公に、当時の驚くべき価値観を提示した『エジプトの判官』がある。古代エジプトでは、ファラオの正当性は神の言葉を聖刻文字で記した『神々の遺言』で保証され、「法」の根拠は文字化されたこの「神の言」にあった。「行政」は神の言葉に支えられた「法」の下位にあり、行政の道具になりかねない貨幣は注意深く排除されていた。公正な評価の感覚が重要だった物々交換時代、主人公は「法」の力で悪と立ち向かう。彼の力の根源はこうした文字と結んだ「言葉」を司っていることにある。

悪者は、当時勃興しつつあった金融資本家、物を貨幣に変え、流通をなめらかにしてさらに肥えようとする、現代ならごくあたりまえの人たちだ。権力を貨幣流通に結び付ける敵を、何千年も前から行われている贈答と交換の神秘的な力と、友人の実力（「法＝神権」を後ろ楯にした暴力）で打ち破る。「文字」の象徴する神意を独占し、「法」を嘉（よみ）するファラオの無言の支援の下に、貨幣の流通が必然的にもたらず無神論の恐るべき退廃を、卵のうちに叩きつぶしたのである。古代エジプトの安定はこうした価

値観の上に築かれていた。

贈与、もてなし、交換が古代社会の通貨であったことは日本列島も同様である。『日本書紀』巻第二十六、斉明六年(西暦 660 年)、大船団を率い、帰服する蝦夷(エミシ=アイヌ)を饗応しつつ北上した阿倍比羅夫は、縄文紀の続く北の海岸で肅慎(ミシハセ)と呼ばれる一族に遭遇する。肅慎族に襲われた蝦夷集団が比羅夫に助けを乞うたのだ。比羅夫は肅慎を喚問するがらちがあかず無言交易を試みる。海岸に並べられた品物の一部(単衣、布)を肅慎はいったん持ち帰るが、しばらくしてまたもとの場所に戻しに来た。この行為の不穏な意味は比羅夫にただちに理解され、肅慎は和を乞うが、戦闘が開始される。

言葉が通じなくとも交渉は可能であり、物の交換は古くから和平と交流をうながす行為である。物や行為そのものに重い意味があった。古代エジプトでは外国の使者の貢ぎ物への欠礼には戦争の危険があった。ヘーロドトスによれば紀元前六世紀、スキュタイ国で窮地にあるペルシャのダレイオス王のもとにスキュタイの使者から、小鳥に鼠に蛙、それに五本の矢が届けられる。このような小動物に身を変えて逃げないかぎり、矢から逃れられないという脅しである(『歴史』第四巻)。ペルシャのロバのいななきを聞き慣れないスキュタイ騎馬軍もあわてているが、交渉においてこうした直接的寓意は言葉にまさった。

縄文時代、三内丸山流通センターにやって来たさまざまな人々の交流が、これに似たようなものであったかどうかはわからない。しかしもしそうだとしたら、和平の交渉あるいは交易に際し文字記号はもちろん、言葉さえ格別必要でなかったことになる。比羅夫の北上は三回目。彼はすでに北の蝦夷とは接触があり、集団の中にはヤマト軍に帰服した蝦夷がいたにもかかわらずこうした交渉を行った。したがって交易の相手である肅慎はヤマト語を理解せず、しかもアイヌ語(方言はいろいろあっただろう)とも異なる言葉を用いていたと思われるが、言葉の違いは当時、交渉の大きな障害にはならなかったのではないか。

アイヌ語は世界に多い無文字言語の一つである。文字化されたのは江戸時代の後半、記述者の言語によって、日本語やロシア語、あるいはローマ字で表記されたのがはじまりである。斉明天皇の頃、文字の政治的効用を理解していた渡来人やその子孫は、文字の使用が力に結びつくことを知っていたが、関東から北に割拠していた人々の大半は、ヤマト化していたかどうかは別として、文字に慣れようとしなかった。アイヌを含め古い列島人は、古代ギリシャの詩人のように、疑いのまなざしで文字を眺めていたのである。

言葉の文字化には財の貨幣化と同様のいかがわしさがある。記号が事物の本質から乖離すればするほど、原始的な心はその間接性に違和感をおぼえるだろう。文字も貨幣も信用できないから彼らは運用もできない。しかし現代人のように事物と記号との恣意的等式に慣れる必要がなく、心に無理な負担がかかることもない。こうした価値観の社会は変化がきわめて緩慢だが長もちする社会である。三内丸山は千五百年、ファラオ体制の全盛時代は五百年続いた。古代エジプトは言葉を表意文字化し、犯すべからざる神聖なもの(聖刻文字で記された「法」)に変えたが、表象文字は事物との関わりを直接感じさせるだけ力そのものであった。しかし民衆文字が生まれ、表象が単純化され恣意的になるにつれ、文字(法)は民衆の手の触れることができるものとなる。ファラオの時代の後も外国(特にギリシャ世界)の貨幣化圧力に抗してきた古エジプトは、プトレマイオス王朝(ギリシャ起源)になって貨幣化(記号経済化)がはじまり、言葉の実体に結びついた平和は終わりを告げる。地中海世界の重心はエジプトの神話から、表音的文字で「書く」こと、すなわち言語のさらなる記号化が始まったギリシャのロゴスに移った。分析的文字はギリシャの思考に構造的変化をもたらしたのである。

一方、文字化と貨幣化に長い間抗してきた北東北では、縄文時代が実質的には江戸時代まで続いた。アイヌほか、弥生以前の民族が主体である東北のヤマト語化は緩慢であり、大衆の文字化は明治以降である。とくに女性の文字化は遅い。言語の記号化、とくにアルファベット化が人の幸福に必須と言う人もいるが、この考えはアルファベット圏の人々の傲慢な無知である。中国語が生まれる以前から存在しているように見える表象の体系は、用いてきた人間の教化に深い意味をもつ。またインドに残る無文字文化をあなどるのは禁物だ。電算機時代の二十一世紀、インド文化固有の運算能力はますますさえわたる。これはヴェーダ時代からつづく彼らの口承伝統の産物ともいえる。

### 通底する「言葉」と「法」

アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏(1993)によると、三内丸山の「サンナイ」はアイヌ語で、「急に増水する川」という意味である。春先の山の雪解け水のようなものが集中する川、という意味だ。東北、とくに秋田、岩手、青森にはアイヌ語起源の地名が多い。小坂町の近辺にも、尾樽部(オタルベ)、古遠部(フルトーベ)、新遠部(ニトベ)、あるいは、相内(アイナイ)、毛馬内(ケマナイ)、比内(ヒナイ)といったベ(ベツ)やナイ(双方とも川や沢という意味)のようなアイヌ語起源の地名がやたらに多い。地名として残っているくらいだから、むかしこの辺でのアイヌの優勢がわかるが、私たち

にアイヌ語の記憶はない。東北弁の特徴がアイヌ語基層から来たのかもしれないのに、その言語の記憶が現代の私たちにすっかり失われているのである。

しかし日本語とアイヌ語とは、基本的な語彙の間でつながっている可能性もある。日本語の「神」は「髪」とか「上」と語源的つながりはないとされている。ヤマト語には八母音(ア、ウがそれぞれ一種、イ、エ、オがそれぞれ二種)の時代があり、上代日本語にはそのなごりが残っていて、イに関してはキ(ギ)、ヒ(ピ、ビ)、ミがそれぞれ二種類あった。ついでに言うと、二種のエは i-a(甲エ)、a-i(乙エ)から成ると考えられ、またオの二種は音韻的違い(意味の違いを伴う音の違い)ではないと言う人もいる。私は、八母音以前の原日本語の母音組織は a/o, i, u の四種あるいは三種だったと考えている。

さて、神のミ(乙種)と(上、髪)のミ(甲種)は音韻が違う。乙種のイは元来、-oi、あるいは -ui だったらしい。例えば木、火は乙種キ、ヒであり、[ko-i、ku-i、fo-i、fu-i]が元に想定されるが、木には木立(コダチ)、火には火影(ホカゲ)という読みがあるから、木、火は元来 ko-i、fo-i だったと考えられる。これにならうと、神のミの元は kamo-i か kamu-i だが、神にはカム(カムカゼ)という読みがあり、カミの前身はカムイであった可能性が大きい。しかし小学館の『日本語大辞典』で「神」の語源としてあげられているもののなかにアイヌ語はない。「神 = 鏡の転」という説があるけれども、鏡のミは乙種ではなく甲種である。だがアイヌ語のカムイには「神」と同時に「熊」の意味があり、「熊」の語源として同辞典にあげられた七つの説のうち、六番目は「カミ(神)の転声」、七番目は「神の意の古語クマに、熊の意の百済方言クマの字(熊)を借りたことによって生じた転義」というものである。この説は「神 = (アイヌ語)カムイ」を肯定しているようにみえる。

青森の恐山(別名宇曽利山、ウソリはアイヌ語で「湾内」)は、人の心配事や将来を占う北東北の口寄せイタコで有名である。憑依して他者(主に死者)の言葉をしゃべる女である。「私は他者の言語である」というラカンの人物は日本では縄文時代から存在していた。柳田国男はイタコがアイヌ語の itak(言葉)に関係すると考えた。アイヌ語には、ナイやカムイ(神、熊)のような母音終わりの語と、itak や pet(ペ、ベ、ベッ)のように子音で終わる語とがある。大韓民国「テーハンミングッ(ク)」のように、後に母音がきた場合、隠れた子音が現れる朝鮮語も子音終わりの語を持つが、日本語は基本的にはそういう言語ではない。itakのような子音終わりの語がヤマト語の環境に入るとイタコ itako のように母音加わるか、琉球語のユタ yuta (巫女。まれに男性もいる)のように、終子音を除いた CV(子音 + 母音)構造になっただろう。ウタ(歌)の語源はまだ定まっていない。『時代別国語大辞典(上代編)』によれば、ウタは古くは節をつけた言葉だけ

でなく単に「言声」でもあった。声にだしていう言を、折口信夫はウタ・フ(訴ふ)に結びつけた。東條操によれば常陸方言には「話す、語る」を意味する「ウタウ」がある。このウタもアイヌ語の itak と関係してはおかしくないのである。

子音終わりのアイヌ語 not (あご、岬)は、地名、能登(ノト)になったかも知れないし、また有音化して「のど」(飲み処、飲ん処、という説もある)になっているかも知れない。京都の濱田敦、東京の大野晋、名古屋出身の馬淵和夫ほか、多くの学者は日本語には子音終わりの語幹があったとみている。「見る」は mi-ru だが、「播く」は mak-Cu (C は子音)と分節すべきだと主張しているのは、ボルドー第三大学の日本語学者ロランス・ラブリュヌである。彼女は日本語の母音(ア、イ、ウ、エ、オ)には、なんらかの子音が必ず先行したと仮定し、その子音は語頭および子音語幹のあとでは消滅するという説を立てた。これによれば mi-Cu においては、C は母音間であるから子音として残って、「見る」mi-ru となり、mak-Cu は、mak- が子音終わりだから、C が消滅して、「播く」maku になるというのである。この説では日本語のラ行音の不思議(古い日本語ではラ行音は語中には存在するが、語頭にはない)が見事に説明される。日本語には、ア、イ、ウ、エ、オ、に対し、ワ、ヰ、ヱ、ヲとか、ヤ、ユ、ヨがあり、言語地図によると沖縄には wu という音もあるから、日本語の母音の前には、古い印欧語のように、w、y、あるいは h (f、ph)、r のような母音的子音が先行していたのかもしれない。しかし「播く」を mak-Cu と分節することはかなり苦しい。この考えでは、「来 ku」や「為 su」など上代に多い単音節動詞において、k-Cu、s-Cu というありえない単子音語幹が生じてしまうのだ。「見る」の語根のミについても、目(ma+i)に内在するマナコのマ、あるいは、守る(モル)のモなど、ミ/マ/モを説明しなくてはならない。手(タ、テ)、酒(さか、さけ)、来(コ、キ、ク)、為(シ、セ、ス)のような母音交替と強勢は、サンスクリットのグナ(語源を同じくする部分の母音の交替)に見られるように、印欧語構造の根幹をなす特徴である。

日本語語根に子音(鼻音 m、n など除く)終わりの時期があったのだろうか。いったん子音終わり構造になったものが、その後再び CV 構造に逆戻りということは考えにくく、また体言にしる用言にしる、上代語ではかなりの数の、しかも基本的な語の多くが単音節だったから、原日本語における語根の子音構造は現実性に乏しい。しかしもし日本語形成上、語根が子音で終わった時代が一時あったなら、それはアイヌ語や古い朝鮮半島語のような言語が優勢だった時かも知れない。「神と熊」の同源性を自明なものとして、これを表わす言葉が広く流通していた時代である。これはおそらく本州の北端から北陸、琵琶湖にまでいたる「東山・北陸道」を占めていたアイヌが、西のヤマトや



九州のハヤト、それに琉球、朝鮮を含む大陸からの人々と交流していた太古の時代にさかのぼる。こうした時代はあったかも知れない。しかし日本語の基になった言語は、子音終わりがあるアイヌ語でも古朝鮮語でもないだろう。日本語の音節単位は古印欧語と同様、基本的には CV 構造であり、アイヌ語や古朝鮮語と接触しても変化しなかったと考えざるをえないからだ。

原日本語は実際、印欧語とも通底していたかも知れない。日本語には「置く」という動詞に関係すると思われる「掟」という法概念があるが、ギリシャ語 *tithemi*「置く、据える」は *themis*「掟」と関係し、この印欧語根 *\*dhe-*「置く、据える」(ポコルニー『印欧語根辞典』)はサンスクリット語 *dha*「置く」、*dhaman*「掟」を生んだ。さらにおもしろいのは日本語、印欧語における「言」と「法」との相関だ。アイヌ語 *itak*(言)に対し、日本語に「法(ノリ)」がある。沖縄のノロ(巫女)もおそらくこのノリに関係する。旧漢字の「法」には、神羊、神判、敗訴、水流といった複雑な過程が含まれているが、日本語のノリは「告(ノ)ル」と言う語の連用形(名詞)である。*noru*の母音間の子音 *r* は、あとで発生したとすれば、ノルの原形は「ノ・フ」のようなものだったかもしれないが、これが「陳ぶ(ノブ)」と関係するかどうかはわからない。エジプトでは文字が声を「法」にしたが、日本では「ノル」という声の行為自体呪力をもち、「祝詞(ノリと)、祈り(いノリ)」にもなったが「呪ふ(ノロふ)」にもなった。ギリシャ語の *dike*(法)は *deiknumi*(示す)、ラテン語の *dico*(言う)とつながり、印欧語根 *\*deik-*「(言葉で)示す、言う」に行き着く。ルーレンは *\*deik-*をさらにユーラシア語語幹 *\*tik-*(指)にさかのぼらせ、そこからアイヌ語の *tek*(手)、子音 *k*を失った日本語の *te*「手」を派生させた。ラテン語の「法」をあらわす *jus*も *lex*も「拘束力をもつ言」である。もともと「集める」という意味の(*lex*の)語根 *\*leg-*は、ギリシャ語では「(言葉を集める) 話す」になり、ラテン語では「(言葉を拾い集める) 読む」になった。*lex*はこうして集められた約束事としての文言である。「言」は文字の支えの有無にかかわらず、エジプト、ギリシャ・ローマ、そして日本においても「法」になりえた。

日本語、印欧語の類似は「言 法」という概念構造にとどまらない。ギリシャ語 *pheme*「託宣、神託」のもとになった *phemi*「言う」と、*phaino*「輝く、示す」の語根(*\*pha-*)は同じものらしく、印欧語根 *\*bha-*(輝く、話す)にさかのぼる。これは「(言葉で)輝く」という意味であり、サンスクリット語では *bha(s)*「輝く」と *bha(sh)*「話す」とに分かれる。『時代別国語大辞典(上代編)』には「フ(言)」という単音節動詞は「イふ」のイが脱落したものと説明されているがはたしてそうか。上代にはさまざまなフがあるが、呪ふ、歌ふ、問ふ、笑ふ、それに東国の否定の助動詞と言われる「なふ」のフが同じ語源だとすれば、この

「フ」(未然形 pha- 連用形 phi-)は形から、また「声」に関わる意味からして、印欧語根 \*bha- に極めて似ているのである。